

## 研究ノート

### フィリピン・パラワン島先住民モルボッグの貝の採捕と民俗知識

辻 貴志

#### キーワード

フィリピン・パラワン島、モルボッグ、貝、採捕、民俗知識

#### 1. 序論

貝類は、食、交易、呪物等として、古来より人類にとって栄養源の供給、経済基盤と他集団との社会関係の安定化、宗教・祭祀の発達に貢献してきた。貝が食料として重要な地位を占めたことは、各地における貝塚等の遺跡の存在が実証している。交易についても、海産の貝が産出されない山地部や内陸部でも貝の出土が確認され、貝が並々ならぬ労力をかけてまで流通する資源であったことが伺われる。タカラガイ等は貝貨として世界を巡った。貝の粘液もまた染料として重宝された。宗教面においても、副葬品等として貝は現れ、貝の呪物あるいは威信財としての価値が確認できる。多産なものから希少なものまで貝類は人類の生活を下支えし、文化を特徴づける資源となってきた。貝類の持つこのような特性は、今日に至るまで根本的な箇所は変わらぬと言っても過言ではないだろう。現在では、貝類はその肉と殻の利用において人類にとって有益<sup>1</sup>な資源となっている。今日、水産養殖の分野においても、貝類は欠かせない資源となっている。人類は貝を消費することで生存基盤を強化しただけでなく、貝殻の利用に見られるように物質文化の面からも文化を創出してきた。

フィリピンでは、貝類の採捕は社会経済の発展に寄与してきた。食料としてタンパク質や栄養の不足を補うだけでなく、漁民の雇用や収入を創出したり、国家の歳入源となってきた (Laureta 2008:1)。さらに、貝細工の原料としても貝類は流通し重要な位置を占めてきた (Evangelista 2001:91; 後藤 2001, 2003)。

時代を遡ると、スペイン統治期以前、フィリピン産のタカラガイは大陸アジアや地中海域において貝貨として利用された他、スペイン人の植民者達はフィリピン群島の真珠に興

---

<sup>1</sup> 人類にとって貝は有益なものばかりではない。例えば、イモガイ類のアンボイナ (*Conus geographus*) とその仲間の貝は人を殺傷するほどの矢毒を持ち、実際に死亡例がある (白井 1997a)。また、シャコガイも人の足や手を挟み溺死させた事件や民話が残るといふ (白井 1997b)、ことの真偽は定かではない。

味を抱いた。当時のフィリピンの女性達は、貝製のブレスレットやネックレス等の装飾品を身に着けていた。生活の中にも貝類は利用された。例えば、*Kapis*として知られるマドガイ (*Placuna placenta*) はランタンやランプの他、窓のガラスとして利用され、悪霊を追い払おうと信じられていた。*Tambuli*、つまりホラガイ (*Charonia tritonis*) は海上の漁民を呼ぶための呼び笛として利用された。キリスト教の浸透により貝類の装飾品としての利用は未開なものに見なされ一旦落ち込んだが、それでも後に貝類は家や教会の装飾に用いられた (Alcina 2004: 391; Research and Information Division Office of the Secretary, Department of Commerce and Industry 1967: 1-2; Bautista 2003)。

以上のように、貝類はその肉を利用するだけに留まらず、貝殻をも利用することで、他の魚介類とは大きな差異を持ち、文化的に人との関わりがより顕著であると言える。貝類と人との関係性を繙くことは、文化史及び人類史の解明と再構築をする上でも欠くことのできない基本的条件の一つと言えよう。

そこで、本論文では、貝類と人との関係性をその採捕と民俗知識の見地から具体的にみていくことで、なぜ人々は貝類を採捕するのか、生存基盤上貝類はいかなる役割を果たすのか、文化の中に貝類を織り込むのはなぜなのかという問いに迫りたい。

本論文で取り扱う地域は、フィリピン・パラワン島南部である。パラワン島と言えば、貝類と人類の関係史を扱う上で極めて重要な地域である。また、大航海時代の交易にもパラワン島の貝は利用された。パラワン島では1960年代にロバート・フォックスにより島南部のタボン洞窟を始め大々的な考古学的調査が行われた。その調査により、フォックスはBC5050~710年にかけての貝製の遺物を発掘している (Fox 1970)。発掘された貝製の遺物は、キンマ噛み (ベテル・チューイング) 用の石灰入れ (*Arca* sp. フネガイ科)、手斧 (*Tridacna gigas* シャコガイ科)、柄杓 (*Melo diadema* ガクフボラ科、*Cassis cornuta* トウカムリガイ科)、スプーン (*Nautilus* sp. オウムガイ科)、ブレスレット (*Conus litteratus* イモガイ科)、ペンダント、耳飾り、ビーズ、穂積具等である。これらの遺物の中には後述するように今日でも使用されているものも含まれている。エヴァンヘリスタは、フォックスらの報告を基に、タボン洞窟の北部に位置するデュヨン洞窟の新石器時代の埋葬墓から貝製の石斧 (*T. gigas*) と円盤 (*C. litteratus*)、キンマ噛み用に用いられたであろうフネガイ科の貝 (*Arca* sp.) が出土したことを報告している

(Evangelista 2001: 88-89)。また、フィリピン国立博物館の記録によると、パラワン島北西部のレタレタ洞窟から新石器時代の埋葬墓が発掘され、副葬品として貝製のブレスレット片 (*C. litteratus*)、スプーン (*Nautilus pompilus* オウムガイ科)、柄杓 (*M. diadema*)、ビーズ (*Cypraea* タカラガイ科、*Nassarius* ムシロガイ科、*Nerita* アマオブネ科、*Strombus* ソデボラ科)、ペンダント (*Abalone* ミミガイ科、*Cypraea*、*Strombus*) などが確認されている (Evangelista 2001: 89)。パラワン島の住民が古くからどのような貝をどのような目的で利用してきたかがおおよそ分かる。エヴァンヘリスタによると、今日、フィリピンの先住民の間では、以上のような貝の利用習慣が生きている

という (Evangelista 2001: 91)<sup>2</sup>。確かに部分的に確認できるものもあるが、次第に利用が希薄化してきているのが実情である。以上、パラワン島の貝類の利用歴はフォックスの考古学的調査に多く依拠せざるを得ないが、彼の調査は、貝類が人々の生計基盤にいかにか寄与していたかという検討にまでは踏み至っていない点が問題点として指摘される<sup>3</sup>。次に、大航海時代についてだが、16世紀から17世紀にかけフィリピン群島にスペイン人が交易、宣教、支配のために訪れるようになる。この頃にはパラワン島の主要民族はスペイン人によって識別されていた。パラワン島にもスペイン人が到来し、島民と交易を行った。交易の物品の中には、真珠貝が含まれていた (Ocampo 1985: 10-11)。今日、パラワン州北部では日系企業も参入する等、真珠養殖が盛んに行われている。以上のように、利用できる考古学および歴史学的資料が量的に少ないものの、過去から現在にかけ<sup>4</sup>、パラワン島では貝の利用が慣習的かつ商業的に行われてきた経緯がある。

以下、本論文では、パラワン島南部の沿岸域に居住し、貝類との接触の深い先住民モルボッグの現在における貝類の採捕と民俗知識について確認することで、上述の問いについて検証してみたい<sup>5</sup>。

## 2. 調査地の概要

パラワン島はフィリピンの南西部に位置し、ミンドロ島と東マレーシア・ボルネオ島に挟まれる。パラワン島はパラワン州の本島であり<sup>6</sup>、行政上MIMAROPA<sup>7</sup>に属する。年平均降水量は1,063.8mmで、年平均気温は26.8℃である (NSO 1996: 11)。おおよそ11月から4月が乾季で、それ以外が雨季にあたる。動植物相は、フィリピンよりむしろボルネオ島に近い。2000年の人口は755,412人である (NSO 2003: 2)。主な産業は農業で、米が主要産物である。

パラワン島は、「フィリピン最後の未開拓地」として知られ、1940年代後半を境に他島から新たな生活の機会を求めたり、フィリピン南部の紛争から逃れて来たりした移民達がどっと流入した。また、豊富な天然資源の開発も進められた。その結果、急激な人口増加

<sup>2</sup> 著者は、パラワン島で先住民パラワンの老女が貝製のプレスレットを装着しているのを実見したが、現在ではほとんど見られなくなった慣行である。

<sup>3</sup> ただ、タボン洞窟の近くにあるグリ洞窟から、8000～4000年前の貝類が20,000点以上発掘され、それらのうちの38%が陸生貝類、35%がマングローブ林域、河口域、河川域の貝類、27%が岩礁域や干潟の貝類であることが確認され (Evangelista 2001: 88)、人々の資源獲得のための環境利用について推察することができる。

<sup>4</sup> ここで、過去から現在を見る、あるいは現在から過去を見る、そして両者を繋ぐことを目指す民族考古学的手法からの調査が有効かつ求められるが、著者にとってこれからの重要な課題である。

<sup>5</sup> 本論文に係る調査は、2002年1月8日から6月7日にかけて行われたものである。

<sup>6</sup> パラワン州は1768の島々から構成される (NSO 2003)。

<sup>7</sup> MIMAROPAは、ミンドロ島 (Mindro)、マリンドゥケ島 (Marinduque)、ロンブロン島 (Romblon)、パラワン島 (Palawan) の頭文字を採った島の集合体による行政区分である。

による自然資源の減少、先住民の社会・文化の変容 (Eder and Fernandez 1996)、キリスト教徒とイスラームとの宗教問題 (森 2003, 2004)、先住民と入植者・開発との土地を巡る問題 (森谷 2003, 2005) 等、様々な問題が生じている。

調査地は、パラワン州の州都であるプエルト・プリンセサから約218km南に位置するバタラサ郡にある (図1)。バタラサ郡は今日、ニッケルの鉱山開発で栄える土地柄である。バタラサ郡を中心としたパラワン島南部は、かつてスルタンによる統治が行われていたことからイスラームの人口が比較的多い地域である。それでも、今日では、人口の約半数をキリスト教徒が占め、残り半分ずつをイスラームと先住民が占める構図である。

調査地区は、バタラサ郡のサロン行政区の沿岸部である。主な民族は、先住民のパラワン、モルボッグ<sup>8</sup>、そして非先住民のジャマ・マプンである。パラワンはアニミズムを信仰し、モルボッグとジャマ・マプンはイスラームを信仰する。これらの民族の間では混血が進んでいて、相互間のコミュニケーションに支障がない。彼らのほとんどが焼畑耕作を営む。水田稲作は沿岸部ではほとんど行われていず、むしろコプラを採取するためのココヤシ園が目立つ (辻 2005a, 2006, 2010a)。家畜飼養も若干行われている (辻 2011)<sup>9</sup>。漁撈は小規模で、釣り漁、定置網漁、潜水漁、刺網漁、採捕漁等が行われている (辻 2005b, 2008, 2010a)。

### 3. 貝の採捕

調査地の沿岸域では、魚類、貝類、頭足類<sup>10</sup>、棘皮類、甲殻類、海藻類、イソギンチャク類が漁獲される (図2)。貝類は魚類について漁獲量が多い<sup>11</sup>。貝類の採捕 (写真1) は漁撈活動の中でも重要な位置を占めることが明らかである。他の漁法と異なり、大した道具や技術・技能を有さなくても実践できることもその顕著な特性である。また、壮健な男性ではなく、老人、女性、子供も参入できる余地がある。採捕従事者の性別と年齢層を確認したところ (表1)、男性が18人に対し、女性は37人であった。年齢別に見てみると、10代と30代、いずれも女性が多い。つまり、30代の働き盛りの母親に分別のついた娘が補助者として同行する形態が一般的と言えそうである。男性の関与は10代に多いが、男性は日中の採捕ではなく、電灯を用いた夜間のナマコ採捕に従事する傾向がある。

---

<sup>8</sup> パラワン島の三大先住民として、パラワン、タグバナア、バタックが挙げられる。モルボッグは、パラワン島南方のバラバック島を故地とし、バタラサ郡、ボルネオのバンギ島等に分布する。

<sup>9</sup> 飼養される家畜は、スイギュウ、ウシ、ブタ、ヤギ、ニワトリ、バリケン、イヌ、ネコ等である。なお、ブタを飼養するのはパラワンのみである。

<sup>10</sup> イカやタコ等、頭足類は厳密には貝類の範疇に属するが、本論文では記述の対象としない。

<sup>11</sup> 貝類の重量は、貝殻を含んだ重量であることを断っておく。

調査期間中に漁獲を確認できた貝類は28種であった(表2)<sup>12</sup>。貝類は砂岩と藻場がモザイクとなった干潟及び泥質のマングローブ林で採捕される<sup>13</sup>。貝類は定置網や刺網に掛かったり、潜水漁で漁獲されることもあるが、ほぼ採捕漁により漁獲される。貝類の採捕は干潮時であれば周年行える活動である。なお、採捕に要した平均所要時間は3時間20分であった(辻 2005b: 85, 2010a: 58)。

貝類のほとんどが定期市で売るために漁獲されるが、仲買人が買い取るもの、自家消費するものもある。

漁獲の上位に位置するフトスジムカシタモト (*Stombus labiatus*) とウズイチモンジ (*Trochus sacellum rota*) は、特にモルボッグによって干潟で採捕され<sup>14</sup>、彼らにとって定期市で稼ぐ重要な現金収入源となっている(写真2)。マングローブ林で採捕されるヤエヤマヒルギシジミ (*Geloina coaxans*) やセンニンガイ (*Telescopium telescopium*) (写真3) も頻繁に採捕され<sup>15</sup>、上記の貝類同様、定期市で販売される。採捕量の少ない貝は他の貝と混ぜて売るか、自家消費に回す。

貝を採捕するのも販売するのもほとんど女性の仕事であるが(写真4)、子供の存在も無視できない。子供は親にくっついて採捕に出るか、友達やキョーダイらと遊びがてら貝の採捕に寄与する。彼らが採捕するのは、食用にはならないノシガイ (*Pusiosstoma mendicaria*) やハナビラタカラ (*Monetaria annulus harmandiana*) といった貝類であり(写真5、写真6)、これらは土地の仲買人が買い取り、貝細工の原料として流通する<sup>16</sup>。貝細工の原料として流通する貝(特に、タカラガイ科の貝)はその他にもあるが、業者から注文があれば採捕するという。

貝の採捕は、貝を定期市<sup>17</sup>に出荷する数日前から1週間程前にかけて行われる。フトスジムカシタモトやウズイチモンジは日持ちがしないので、採捕したらすぐに出荷するという。定期市に積極的に出向く人は、そうでない人の貝を買い取る<sup>18</sup>。ヤエヤマヒルギシジミやセンニンガイは日持ちがするということから、採りためてから出荷する。フトスジムカシ

<sup>12</sup> 貝の同定には、久保・黒住(1995)を参考にした。貝の計量にはバネばかりを用いた。

<sup>13</sup> 干潟では素手で貝を採捕することがほとんどであるが、マングローブ林では鉈を用いて泥を掻き貝を採捕する。

<sup>14</sup> モルボッグは貝類の採捕と販売に積極的であるが、パラワンは消極的である。その事情として、彼らがアクセスできる漁場の質の違いが影響していると考えられる。本点については、辻(2005a: 85)で触れた。なお、パラワンは、近年、タツノオトシゴの採捕を熱心に行っている(辻 2011: 52)。

<sup>15</sup> マングローブ林では、その他ヒルギフナクイムシが採捕されるが、それについては辻(2010b)を参照のこと。

<sup>16</sup> 貝細工として利用される貝類の流通経路については確認できていない。今後の調査課題としたい。

<sup>17</sup> 定期市は大小のものを合わせると各地でほぼ毎日開催されているが、モルボッグはアクセスしやすい、ニッケル鉱山開発で賑わうリオ・トゥバにあるサント・ニーニョの定期市に専ら貝を売りに出向く。

<sup>18</sup> 1caltexあたり15ペソで買い取られる。集落内での売値も同値である。

タモトやウズイチモンジ等の貝は1ℓほどの容器に入れて計量し、その単位<sup>19</sup>で販売される(写真7)。ヤエヤマヒルギシジミやリュウキュウサルボウ (*Anadara autiquata*) といった二枚貝はたいてい殻を剥き、身をコーヒーグラス<sup>20</sup>に詰めて計量し、水を入れたビニール袋に入れて出荷する。ウズイチモンジやセンニンガイ等の巻貝は、消費者が身を口で吸い出して食べられるよう貝頂を鉋で叩き割り穴を空け空気が通るように加工する。定期市で売られる貝の値段は、調査当時(2002年)は1 *caltex/baso*あたり10ペソ(当時1ペソは約2.5円)であったが、2012年には20~25ペソ(1ペソ=約1.85円)にまで値上がりしていた。

以上、貝類の採捕は、モルボッグにとって、現金収入を得るための生計基盤の一つとして不可欠な要素となっている<sup>21</sup>。貝の採捕、加工、販売も一手に担い、地域では貝を採捕し売る集団として認知されており、自分達でもそうしたイメージを共有している(辻 2005b, 2010a)。特に、女性の果たす役割が大きい。また、与えられた貝類資源を余すところなく利用していると言える。貝類の中で販売用や自家消費に利用されたものは、確認できた貝類55種のうち28種(51%)であった。その他の貝類(49%)については、次章の民俗知識と関わってくる。

#### 4. 貝の民俗知識

貝類は食用としての価値や経済的な価値の他、文化的な価値、つまり民俗知識も有する。モルボッグの貝類に関する民俗知識を調べるにあたり、標本と図鑑を基に55種類の貝をリストアップし、それらについて人々に聞き込みを行った(表3)。聞き込みの大半は筆者が行ったが、調査助手が行った部分もあることを断っておく。

まず、命名について確認したい。55種類の貝の内その全てに方名が確認できたが、方名の意味について確定できたのは30種類(60%)であった。30種類の内、形態に因む命名が為なされているのが15種類(50%)と半数を占める。次いで、習性に因むものが8種(27%)を占め、色2種(7%)、道具2種(7%)、味1種(3%)、民話1種(3%)、採捕法1種(3%)と続く。

命名の詳細については表3に委ね、ここでは形態と習性に因む命名について若干触れておきたい。まず、形態に因む命名について、「乳房」(ウズイチモンジ)、「目」(リュウケンサザエ *Turbo petholatus*)、「歯」(アマオブネの一種 *Nerita* sp.)、「指」

<sup>19</sup> 貝を計量する容器は、*Caltex*というオイル会社の容器が使われたことから、貝を計量する単位として定着している。1 *caltex*はおおよそ1ℓに相当する。

<sup>20</sup> コーヒーグラスは200ml程の容量である。このグラス(容器)は *baso* と呼ばれ、二枚貝の身を計量する単位となっている。

<sup>21</sup> 今日、彼らの主要な生業である焼畑耕作は地味の低下により生産性が低くなり、焼畑耕作で生計を立てることが困難になりつつある。貝類の採捕で稼いだ現金でもって、定期市で移民が水田耕作で作った米を購入するというジレンマに陥っている(辻 2005a: 83, 2010a: 59)。

(コガスリクダマキガイ *Xenuroturrus millepunctata* ?)、 「鼻水」 (ヒルギフナクイムシ *Bactronophorus thoracites*) といった身体器官や生理現象が命名に織り込まれていて、人々が貝類を人間の身体になぞらえて認識していることが伺える。「鍵」 (ツノブエガイ *Pseudovertagus aluco*)、 「手斧」 (ハボウキガイ *Pinna bicolor*) といった日用の物質文化としても認識している。これらは人間界における分類であるが、「ジュゴン」 (ナガタケノコカニモリ *Rhinoclavis fasciata*)、 「ニワトリの頭」 (ガンゼキボラ *Chicoreus brunneus*)、 「カタツムリ」 (コハクオカミミガイ *Ellobium opportunum*)、 「ウマの足跡」 (オモテガイ *Spondylus squamosus*)、 「サルのかかと」 (キクザルガイの一種 *Chama* sp. ?) といった動物界、「切り株」 (センニンガイ) や「米粒」 (ノシガイ) といった植物界、「月」 (トミガイ *Polinices mamilla*) 等、自然界にも分類の範囲は及んでいる。命名の分類は人々の内面的世界と外面的世界を表出し、文化と自然の領域への関与の度合いを示すメルクマールとして機能していると言えよう。

次に、習性に因む命名について、「座る」 (シャカトウダタミ *Diloma radula*)、 「蹴る」 (フトスジムカシタモト) といった身体行動の他、「吸い付く」 (オキナワイシダタミ *Monodonta labio*)、 「集まる」 (ウミニナの一種 *Clypeomorus* sp. ?)、 「お喋りな口のように身が活発に動く」 (トウコオロギボラ *Cymbiola vesperilio*)、 「紫色の液を放出」 (タツナミガイ *Dolabella auricularia*)、 「砂や泥の中から水管を目のように出している」 (ヌノメガイ *Periglypta puerpera*)、 「肉量の多い」 (ミミガイ *Haliotis asinine*) といった習性が織り込まれている。貝の習性は、人々の採捕行動にも影響している。例えば、ヌノメガイはその水管を見抜くことで採捕され、ナガタケノコカニモリはこの貝が砂上を這った後を見極めて採捕される。タツナミガイも地域によっては、その紫色の液を表出させることで採捕される<sup>22</sup>。貝の習性に関する人々の洞察は、何気無ながらも現象の観察に対する注意深さが込められていると言えよう。実際の採捕活動の中で、このような知識がいかに関与され、漁獲量の増加に寄与しているのか、あるいは知識の個人差がどう漁獲に影響するのか、今後取り組まなければならない課題である。

貝は命名される対象であるだけに留まらず、道具や嗜好品等、実用的なレベルで利用される他、民話や禁忌等、民俗的なレベルとして文化の中に織り込まれる。実用的なレベルとは、道具や嗜好品といった日常生活に利用されるものを指す。民俗的なレベルとは、民話や禁忌といった日常生活に作用するものを指す。55種類の標本の内、実用的な例が確認できたのは、道具4例(7%)、嗜好品2例(4%)、玩具2例(4%)、装飾品1例(2%)であった。民俗的なレベルについては、俗信4例(7%)、地名1例(2%)、禁忌1例(2%)、民話1例(2%)、修辞表現1例(2%)であった。こちらも詳細は表3に譲るとして、その幾つかについて紹介しておきたい。

先に実用的なレベルについて見ていきたい。フィリピンを始め東南アジアではベテル・チューイング(キンマ噛み)は広く行われている慣行であり、パラワン島においても古く

<sup>22</sup> 辻(2007)を参照。

から行われてきた。Fox (1970: 62-63) によると新石器時代の遺構からベテル・チューイングに使用されたと推測される石灰が付着したフネガイ科 (*Arca* sp.) の貝が出土している。今日、それが利用されているかどうか不明であるが、筆者は一度、イモガイ科のアンボンクロザメガイ (*Conus litteratus*) がベテル・チューイング用の容器に利用されていることを実見した。ベテル・チューイングにはキンマ (*Piper betle*) の葉とビンロウ (*Areca catechu*) の実、そして石灰 (写真8) を要するが、石灰は二枚貝の殻から作られる。利用される二枚貝はリュウキュウサルボウガイ、ヌノメガイ、ヤエヤマヒルギシジミ等である。これらの貝を火にかけ砕いて粉にすることで石灰にする (写真9)。

二枚貝はまた、稲を収穫する際の穂積具 (*golit*) として利用される。穂積具には、*Schizostachyum lumampao* (イネ科) の桿を拳に納まる大きさに加工したものに鉄の刃を付けたカッターやアルミ製のスプーン等も用いられるが、ヤエヤマヒルギシジミ等の大型の二枚貝も使用される。Fox (1970: 140, 146) は、鉄器時代初期の遺構からパラワンやタグバヌアによって穂積具として利用されたと考えられる二枚貝を発掘しており、もしそれが実際に農耕に利用されていたとするなら鉄器時代初期における穀物栽培の証拠になると指摘している。

その他、トウコオロギボラはペンダント、トウカムリガイ (*Cassis cornuta*) やホラガイは大漁を知らせる際の呼び笛 (*budjung*)、ホシダカラ (*Cypraea tigris*) やイモガイの一種 (*Conus* spp.) は子供の玩具として利用されてきたが、これらについても長い間利用されてきたことを偲ばせる。

次に、民俗的なレベルについて、まず1例のみだが民話が確認できた。コオニコブシガイ (*Vasum ceramicum*?) やオオニコブシガイ (*Vasum tubiferum*) は *tongisang balu* 「未亡人の涙」と呼ばれるが、これらの貝を食べようとした未亡人が貝殻のあまりの堅さにどうやって中の肉を取り出して良いか分からず涙したという民話を帯びている。同様の民話が魚において確認できる。シマタレクチベラ (*Hemigymnus fasciatus*) やタレクチベラ (*Hemigymnus melapterus*) は *tongisan billi* 「ワシの涙」と呼ばれるが、ワシがこれらの魚を捕えようと何度も試みたが悉く失敗して涙を流したという民話である (辻 2005b)。

俗信・禁忌について、ミミガイ (*Haliotis asinine*) と、ヒメジャコ (*Tridacna crosea*) 及びシャゴウ (*Hippopus hippopus*) といったシャコガイ科の間でプラスとマイナスの対立が確認できた。ミミガイは肉量が多いことから貝殻を米櫃に入れておくといつまでも米がなくなることはない信じられておりプラスの価値を持つ。また、お金も貯まると言われ、財布やポケットに入れられる (写真 10)。北米のインディアンは、ミミガイの仲間であるクジャクアワビ (*Haliotis fulgens*) を財宝として珍重したといい (白井 1997a: 659)、日本でも三重県ではトコブシ (*Sulculus diversicolor supertexta*) は縁起の良い食べものとされた (白井 1997a: 655)。日本では時に猥雑だが、アワビを女性器に見立てることがある。この種の貝に人類は豊穡を連想する認識構造を有しているのかも知れない。食用、工芸用としても強い価値があり、マイナスのイメージを帯びることはなかったのではなからうか。一方、シャコガイ科の貝は調理すると肉が縮むことから米の収

穫の減少を連想させる。シャコガイ科についてはパラワンからの聞き取りの結果だが、モルボッグも同様の観念を有している可能性が十分にある。また、シャコガイを持って焼畑を歩くと稲が死ぬと考えられていてマイナスの価値が付与されている。シャコガイはフィリピンを始め、とりわけオーストロネシア地域において、貝斧、貝貨、腕輪、魔除け等に利用され(白井 1997b: 967, 1005)、プラスの価値を有するが、なぜパラワンの間ではマイナスの価値が生じたのであろうか。稲の凶作とシャコガイの肉の縮みが過去に重なった経緯があるのかも知れない。農繁期に海に出てシャコガイを採って食べている場合ではないという戒めに基づくものかも知れない。あるいは、その文化的な重要性に翻って禁忌が込められたのかも知れない。今後、より詳細な聞き取り調査を実施すると共に、世界の事例を渉猟し、その訳を突き詰めていく必要がある。いずれにせよ、ミミガイとシャコガイの価値の対立は、貝の属性への飽くことない観察と、稲の豊穰と凶作を常に意識した焼畑農耕民ならではの発想の現れであろう。

最後に、オニホネガイ (*Murex tribulus forma spicatus*) について簡単に記しておきたい。この貝は、魔除けとして家の戸口に掲げられる(写真 11)。この貝の刺が悪霊の目を突き刺すという<sup>23</sup>。

以上、貝の民俗知識はモルボッグの文化と自然との関係性によって育まれ、生活知として彼らの日常の生活に食料の枠を越えた生活の規範となる知恵を与えると共に、生活の機微に変化を与えると同時に社会にふくよかさを与えるシステムとして機能してきたと考えられよう。

## 5. 考察

本論文では、フィリピン・パラワン島の先住民モルボッグの貝の採捕と民俗知識を事例に基づいて見てきた。まず、貝の採捕について検討してみたい。モルボッグは元来焼畑耕作民であるが、沿岸域で貝類採捕等の漁撈活動に熱心に従事する「焼畑漁撈民」的な性格を持つ。彼らは、干潟及びマングローブ林を隈無く利用し、生存に必要なタンパク源としての貝類の採捕よりむしろ商業的価値のある貝類の採捕に従事する。彼らの貝類の採捕は市場を指向している。

彼らが焼畑耕作に多くの労力を割いていた頃、貝類はタンパク源を容易に補うものであったであろう。この頃、貝類にはほとんど市場価値がなかったという。しかし、1970年代に近郊のリオ・トゥバの町にニッケル鉱山会社が操業を開始すると、多くの入植者がバタラサ郡に流入した。入植者の流入は、モルボッグの焼畑耕作に影響を及ぼし、焼畑地の減少に伴う地力の低下が生じ、焼畑耕作を中心に生業活動を展開させていくことが困難となっていった。一方で、入植者達の増加は、モルボッグが採捕する貝類への需要の拡大に繋がった。

<sup>23</sup> 同様の風習は日本においても確認できる。特に、筆者が居住する奈良県の奈良町ではヒラギの葉にイワシの頭を刺して魔除けとする「柊翹」の風習が現存している。

モルボッグは採捕した貝類を市場で入植者に売ることにより現金収入を得るようになった。貝はまた貝細工の原料としても採捕されるようになり、共同体のレベルを越えて地域的かつ国際的な資源として価値を持つようになった。焼畑耕作の低迷は、貝類の採捕と販売で補われることとなった。今日、地域的に貝類を積極的に採捕するのはモルボッグのみであり、貝類の採捕と販売はモルボッグの寡占状態となった<sup>24</sup>。このように、モルボッグの貝の採捕は、焼畑耕作の合間の自給レベルのものから、現金収入を得るための商業的レベルのものに変化した。モルボッグにとって貝の採捕は、安定を望めなくなった焼畑耕作の不況を埋め合わせるべく生業基盤を補強する役割を果たしている。

次に、貝の民俗知識について検討したい。民俗知識は、自然現象一般を解釈し、文化化するための結果的産物であり、世界の自然を利用して生きる諸民族に広く見出せるものである。また、貝に限らず、動植物一般の他、気象、天体、地形、土壌等、様々な自然現象に認められる。民俗知識は、「自然と密接に接触しながら観察と試行錯誤を繰り返し、相互に情報交換をおこない、よりよき実践と価値を求めて生きていく人びとの暮らしの中にある」（寺嶋 2002: 10）。ここで寺嶋が指摘する実践とは自然を利用しその産物を獲得すること、価値とは自然を文化の中に織り込んで親しみ楽しむ態度を意味するであろう。モルボッグの貝の民俗知識がサブシステムにおいて実用的であることは、物質面での利用の他、貝の習性を知識として採捕活動に応用していることから明らかである。また、民話や禁忌といった精神文化面においても貝は文化に彩りを添えるキャラクターとして現れ、生活に「めりはり」を与える有用な側面を有していると考えられる。

モルボッグの貝に対する見立ては、まず命名について形態や習性に基づくものがほとんどであった。このことは彼らが利用する貝の価値や採捕技術を反映しているであろう。これらを知らずして貝を採捕することは、効率的側面からも経済的側面からも決して成果が良いものであるとは言えないであろう。貝を巡る環境や生態の熟知こそが、貝の採捕を有利に進める基本的条件であろう。命名の意味が確認できなかった種についても、環境や生態に関する知識が共有されていることは貝の採捕量に関するデータ（表2）の結果からも明らかである。ここで、松井（2011: 66, 103）が指摘した地域間の貝の似より<sup>25</sup>が分類に影響しているのではないかという点について検討してみたい。それは貝類の棲息環境や習性に合わせて人類の知識や技術もまた似通ってくると言い換えることができよう。更に採捕技術も洗練されてくるであろう。松井の指摘は貝類の地域間における分類構造に焦点が当てられているが、貝の似よりは採捕活動及び民俗知識に大きく関与するものである。本稿においても、貝類の生息環境や習性に合わせた採捕活動が行われていることを明らかにしたが、人々は考えを巡らし貝を採捕している。その考えの集積が集団の民俗知識であると言えよう。民俗知識はある特定の集団で共有されている知識であると考えられているが、

---

<sup>24</sup> なぜ、モルボッグが他の民族集団より貝類を寡占的に採捕するのかという理由については、民族間の生業形態並びに利用する漁場空間の状態に関する比較検討が必要であろう。

<sup>25</sup> 「似より（似寄）」とは、「に よ っ て い る こ と」（『広辞苑』第3版）、つまり、「よく似ていること」を意味する。

知識には個人差がある。良く知っている人とそうでない人がいるのである。同一集団内においても、年齢、性別に留まらず、個人的関心の濃淡によって民俗知識には差が生じる。貝類の知識に関する個人差(飯田・名和 2008: 158)を追究していくことで、分類を構成するよりマイクロな知識や技術が明らかにされよう。また、違った民俗分類の基準が見えてくるかも知れない。この点で、本稿はモルボッグの貝との関係性を具体化したものとは言えないが、大要を披露した。個人差により、いかに分類にぶれが生じるかどうかについての検討は今後の課題となるであろう。また、貝類に関する民俗知識は環境や生態に馴染んだ身体化されたものであるとも言えよう。貝の命名という民俗知識は、身体化されることで採捕の技術や技能の向上に寄与していると考えられる。また、命名は、貝を採捕するサブシステムの労苦を楽しみや喜びといったマイナー・サブシステムの要素で鎮静する作用を持つのではなかろうか。干潟やマングローブ林を歩くことはかなりの身体的負担を要する。例えば、田植え歌は田植えの労苦を軽減するために歌われたが、ここでの命名はそれと同じ機能を果たしているのではなかろうか。命名することで世界が広がり、気持ちの切り替えの選択肢が生まれる。辛い採捕の場面は、忍耐の場から楽しみや喜びの場として変化する。事実、人々は和気あいあいと貝の採捕をしているのだ。

## 6. 結語

本稿では、貝が道具や嗜好品、民話や俗信等として物質文化並びに精神文化の面でも機能していることを示した。貝は日常の必要や規範を満たす要素となっている。必要や規範は人々がそれらを求めた結果生じたものである。そのために、貝という身近で安定的な素材が文化の中に組み入れられたと考えられる。貝という素材を文化によって加工することで、貝には単なる食材としての意味に留まらない意義が付与される。道具は人々の生活を利し、俗信や禁忌は人々を律し、嗜好品は人々の精神を安定させる。玩具、装飾品、民話等も人々の生活文化に潤いを与える。このようにして、モルボッグは文化の中に貝類を織り込んでいるのである。モルボッグにとって貝とは、以上のような役割を果たす文化的装置であり、その民俗知識は彼ら独自の生態環境への眼差しであると共に生活の技術<sup>26</sup>の体系であるとも言えよう。

## 参考文献

- Alcina, Francisco (translated, edited and annotated by Kobak, C.J. and L. Gutiérrez)  
 2004 *History of the Bisayan People in the Philippine Islands*, Vol.II, Manila: UST  
 Publishing House.  
 Bautista, Angel

<sup>26</sup> 篠原(2001: 175)は生活の技術について、「直接自然と接して技術や技能を獲得して、身の回りの環境や自然を資源として使う」ものであると定義している。

2003 *Shell Ornamentation of La Purísima Concepción Parish Church, Guiuan, Eastern Samar*, Manila: National Commission for Culture and the Arts.

Eder, James and Janet Fernandez (eds.)

1996 *Palawan at the Crossroads: Development and the Environment on a Philippine Frontier*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Evangelista, Alfredo

2001 *Soul Soul Boat: A Filipino Journey of Self-Discovery*, Manila: National Commission for Culture and the Arts.

Fox, Robert

1970 *The Tabon Caves: Archaeological Explorations and Excavations on Palawan Island, Philippines*, Manila: National Museum.

後藤 明

2001 「フィリピン・ビサヤ地方における手工芸生産」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』10: 29-54。

2003 「フィリピン・ビサヤ地方の貝の流通と工芸」、田和正孝編『東・南シナ海の沿岸域における水産資源の利用とそれをめぐる民族ネットワーク』日本学術振興会平成13年度科学研究費補助金(研究課題: 東・南シナ海の沿岸域における水産資源の利用とそれをめぐる民族ネットワークの研究〔基盤研究B〕、研究代表者: 田和正孝、課題番号: 13480018)、pp. 99-106。

飯田 卓・名和 純

2005 「奄美大島北部、笠利湾における貝類知識-エリシテーション・データをとおした人-自然関係の記述」『国立歴史民俗博物館研究報告』第123集: 153-183。

久保 弘文・黒住 耐二

1995 『沖縄の海の貝・陸の貝-生態/検索図鑑』、沖縄出版。

Laureta, Liberato

2008 *Compendium of the Economically Important Seashells in Panay, Philippines*, Quezon City: The University of The Philippines Press.

松井 健

1983 『自然認識の人類学』、どうぶつ社。

2001 『琉球のニュー・エスノグラフィー』、人文書院。

森 正美

2003 「「イスラーム復興」のフロンティア-フィリピンにおける「運動」と「覚醒」のダイナミズム-」、杉本良男編『宗教と文明化』、pp.189-208、ドメス出版。

2004 「「正義」のモザイクの可能性-フィリピンの移民空間のもめごと調停にみる<都市的なるもの>の現在」、関根康正編『<都市的なるもの>の現在-文化人類学的考察-』、pp.189-208、東京大学出版会。

森谷 裕美子

2003 「フィリピン・パラワン族の土地問題と開発」、片山隆裕編『民族共生への道-アジア太平洋地域のエスニシティ』、pp.171-194、九州大学出版会。

- 2005 「神聖なる真実の儀式—フィリピン先住民族のドキュメンタリーにみる失地回復運動」『九州国際大学国際商学論集』16 : 75-99。

National Statistics Office (NSO)

- 1996 *Provincial Profile: Palawan*, Manila: National Statistics Office. National Statistics Office (NSO).
- 2003 *2000 Census of Population and Housing, Report No.2-73 D (Palawan) Volume 1: Demographic and Housing Characteristics*, Manila: National Statistics Office.

Ocampo, Nilo

- 1967 *The Philippine Shellcraft Industry*, Manila: Research and Information Division Office of the Secretary, Department of Commerce and Industry.
- 1985 *Katutubo, Muslim, Kristyano: Palawan, 1621-1901*, Kolonya, Alemanya : Research and Information Division Office of the Secretary, Department of Commerce and Industry.

篠原 徹

- 2001 「環境の民俗からみた生活技術」『アソシエ』7 : 173-182。

白井 祥平

- 1997a 『ものど人間の文化史 貝Ⅱ』、法政大学出版局。
- 1997b 『ものど人間の文化史 貝Ⅲ』、法政大学出版局。

寺嶋 秀明

- 2002 「フィールドの科学としてのエスノ・サイエンス—序にかえて」、寺嶋秀明・篠原徹編『エスノ・サイエンス』、pp. 3-10、京都大学学術出版会。

辻 貴志

- 2005a 「パラワン島南部におけるモルボッグの漁撈活動の展開—焼畑低迷後の市場化とその今日的意義」『エコソフィア』第16号 : 73-86。
- 2005b 「フィリピン・パラワン島南部におけるモルボッグの民族魚類学的研究—市場経済下の民俗知識とその変容」『人間文化』第20号 : 69-90。
- 2006 「フィリピン・パラワン島における先住少数民族の焼畑耕作とその民俗知識・儀礼に関する研究」『人間文化』第21号 : 101-115。
- 2007 「フィリピン・マクタン島沿岸域におけるサルポとタツナミガイの採捕と利用」『日本熱帯生態学会ニューズレター』第68号 : 6-12。
- 2008 「生業が織り成す共存関係—フィリピン・パラワン島先住民の漁労活動を事例に」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』、pp. 305-308。
- 2010a 「フィリピン・パラワン島先住民モルボッグの生業と社会環境変化」『2010年理念・哲学・スピリットの世代間継承および地域内あるいは地域間伝達のプロセスの研究報告書』、pp. 51-64、天理大学地域文化研究センター。
- 2010b 「フィリピン、マングローブ林域におけるヒルギフナクイムシの採集と利用」『人間文化』第27号 : 63-77。
- 2011 「パラワン島南部の暮らしと家畜」『季刊民族学』第136号 : 52-54。